

仏教の浸透からみた古代伊勢の宗教世界

齋宮歴史博物館 大川勝宏

1. はじめに

伊勢神宮は、宗教的に仏教とは対極的な位置にあったと考えられがちだが、国内の他の神社と同様、神仏習合思想の影響は受けてきた。とはいえ、皇祖神を祀り古代には私幣禁断とされてきた伊勢神宮では、他の地域と異なった仏教の受容・融合の過程を経ている。

古代の律令制のもと、伊勢神宮の領地とされ、その税はすべて神宮が収納した郡を「神郡」といい、そのうち神宮に近い三重県の伊勢平野南部に位置する**度会郡・多気郡・飯野郡**を「**神三郡**」という。本稿では、飛鳥時代には設置され、大神宮が所在する度会郡と、その西側に位置し、その西端に齋宮が置かれた多気郡を中心に古代における仏教浸透の状況を整理し、伊勢神郡における仏教浸透の多面性を確認するとともに、さらにそれが神祇信仰に与えた影響を考えてみたい。

2. 伊勢神郡域の仏教施設の成立と退転

伊勢平野北・中部の郡と異なり、多気郡・度会郡・飯野郡には飛鳥・白鳳期から奈良時代半ばまでは寺院は設置されていない。そうした中で、奈良時代後期に次のような史料が現れる。

- ・天平神護二(766)年 丈六仏像を伊勢太神宮寺に造らせる(続日本紀)
- ・神護景雲元(767)年 逢鹿瀬寺を永く太神宮寺とする。(大神宮諸雑事記)

これは、古代において国家から特別な地位を与えられた伊勢神宮にも、神仏習合の流れを受けて附属寺院である神宮寺が設置されたことを示し、多気郡と度会郡の堺にある**逢鹿瀬廢寺**がその遺跡と考えられている。逢鹿瀬廢寺は、伊勢神宮内宮の西約15kmの、宮川左岸段丘上にあり、太神宮寺号を付与される以前からすでに存在していた可能性はある。発掘は行われておらず伽藍配置や構造は不明だが、これまで奈良時代後期の多数の軒丸・軒平瓦が採集されている。

多気郡の齋宮においても、奈良後期の称徳天皇の時代には、齋王が派遣された記録が無いだけでなく、逢鹿瀬廢寺や、神郡外の飯高郡の丹生寺廢寺と同范・同型の軒瓦が見つまっている。また仏器である鉄鉢形須恵器・土師器が小型竪穴建物や土坑・溝から出土し、齋王が置かれなかっただけでなく、伊勢太神宮寺と連動して仏殿が置かれ、その周囲に優婆塞や優婆夷のような人々がいたとみられる。

称徳朝は、僧道鏡が実権を持つ中、王権の源を仏教的な徳に求め、大嘗祭ですら僧侶が関与した時代であり、伊勢神宮・齋宮でもこうした中央の動静にダイレクトに反応していたと言えるだろう。しかし、称徳が崩御し道鏡が失脚すると強い反動が起きる。

- ・宝亀三(772)年 伊勢月讀神の祟りにより、伊勢神宮寺を度瀬山房に移す。(続日本紀)
- ・宝亀五(774)年 多気・度会郡堺の仏地を祓い清めて神地とする。(平安遺文)
- ・宝亀六(775)年 伊勢神民を逢鹿瀬寺の僧が打凌ぐ。(大神宮諸雑事記)
- ・宝亀七(776)年 前年の咎により、神宮寺を停止し、飯野郡に移す。(大神宮諸雑事記)
- ・宝亀十一(780)年 祟りにより、伊勢太神宮寺を、飯野郡以外の便地に移すのを許す。(続日本紀)

このように神の祟りや神郡内での衝突を理由に逢鹿瀬寺は神宮寺号を停止され、神宮寺そのものも徐々に神郡から排除され、歴史から消えていった。さらに、宝亀年間頃には神祇氏族である大中臣清麻呂が右大臣として太政官の首班にあったこともあり、光仁～桓武朝にかけて伊勢においては神祇信仰があらためて優位に置かれ、神仏分離が進められるようになる。延暦二十三(804)年に伊勢神宮の規模や祭祀・遷宮について記した『止由気宮儀式帳』『皇太神宮儀式帳』が編纂され、当時の神宮の実態が朝廷に報告されるが、この中で「寺」や「僧」を「阿良々木」「髪長」などと仏教的な言葉を言い換える「忌詞」が示され、神宮において仏教が禁忌された状況がうかがえる。弘仁七(816)年には大神宮司の大中臣清持が禁忌を守らず仏事を行ったため、大祓を課されたうえで解任されるという事件が起こる(日本後紀)。齋宮においても仏教が禁忌とされたことは、10世紀に編纂された『延喜齋宮式』に

神宮同様、仏教に関する「忌詞」が定められていることからわかる。8世紀末から少なくとも9世紀前半には、伊勢神郡内でも多気・度会郡では、宝亀五年の「仏地を祓い清めて神地とする」といった、仏教を排し神祇信仰を優先する状況が進行していたようである。

3. 多気郡における9世紀の仏教再浸透

宝亀年間の神宮寺や仏地の排除により、齋宮だけでなく多気郡全体でも8世紀末から9世紀前半には寺院などの仏教的な痕跡は見いだせなくなる。その一方で、多気郡の櫛田川（磯部川）中流域に9世紀はじめには東寺領荘園として荘園研究では有名な大国・川合荘が成立している。地域の実態として寺領が成立しているのである。

この時代の多気郡で特筆すべきなのは、仁和元(885)年に在地氏族の飯高諸氏が、多気郡西部の標高約280mの城山の鞍部に**近長谷寺**を建立したことである。その財産目録である、天曆七(953)年の奥書を持つ『近長谷寺資材帳』(以下『資材帳』という)によると、山上に檜皮葺・三面廂で高欄を持つ堂があり、一丈八尺(約5.5m)の**金色の十一面観音像**を本尊としていた(現在の長谷寺式の本尊は平安時代後期の作とされ、像高約6.6m)。この堂は「光明寺」という法名を持っていたことも記載されている。この他、鐘楼・僧房・政所屋など計7棟の建物があつたとされる。

さらに『資材帳』によると、近長谷寺は飯高諸氏を本願施主として、内外近親等にも勧めて氏寺として建立されたものだが、神三郡内の様々な氏族からの土地や法具の寄進を受けており、伊勢氏や磯部氏といった在地氏族の他、中臣氏・大中臣氏・荒木田氏・神部氏といった神宮祇官に連なる氏族を含んでいる。朱雀朝の齋王であった徽子女王が天慶八(945)年に齋宮を退下したあと、母の供養として白玉を施入したという記事も当時の仏教や寺院への意識を垣間見る上で重要だろう。こうした寺院への施入は「除病延命」といった現世利益的な目的から「正月悔過」「二月悔過」といった法会を契機としていたという指摘がある。『資材帳』巻末に現れる座主の泰俊(飯高諸氏の孫)は東大寺僧、別当の聖増は延暦寺僧であり、近長谷寺の法会の施行にはこれら大寺院の関与も想定されている。本尊の規模や多くの氏族を結集した造寺・寄進活動からみて、地域の有力者である飯高氏の氏寺というだけでなく、多気郡の櫛田川中流域の仏教浸透の上で象徴的な存在だったとみることができる。

『資材帳』には、近長谷寺に施入された土地の周囲に中臣寺、穴師子寺、山田寺、福田寺、相可林寺、磯部寺、丹生寺、長谷寺、宮守寺、入江寺、法楽寺、清水寺、疋田寺、富岑寺、佐奈山寺、泉寺といった郷名や地元氏族名を冠する寺院・堂がみられ、10世紀半ばには集落規模を単位とする多数の小規模寺院・堂が出現している。これらは現在まで存続するものではなく、考古学的な調査でも明らかではない。おそらく瓦や礎石を用いない小規模なものだったのだろう。これら小規模寺院・堂と近長谷寺との先後関係は断定できないが、あるいは近長谷寺の建立が大きな契機となって多気郡内の仏教浸透を加速したのではないだろうか。

多気町河田の**カウジデン遺跡**や**東裏遺跡**では、口縁部や内面に油煙や油染みが付着した、9世紀後半の土師器杯類・灰釉陶器碗が多量に出土しており、「中万」「中臣」の墨書がみられる。カウジデン遺跡では平安時代に属する7間×6間の大型四面廂の掘立柱建物がみつかっており、先に見た小規模寺院・堂の一つである可能性がある。その一方で「中臣」墨書は神祇氏族との関連を伺わせるし、幅15mの水路から土馬や齋串が出土している事は注目できる。またカウジデン遺跡とは櫛田川を挟んで対岸の飯野郡に入る松阪市中万の**大川上遺跡**でも、油煙が付着した同時期の土師器杯に「神宮寺」「観世音」の墨書がみられる。『日本三代実録』では貞観八(866)年の五月に疾病が流行し、神宮三節祭での齋王の奉参も中止する事態となり、多気・度会郡では飢饉が発生し賑給が実施されている。油煙が付着した多量の土器類は燃灯供養の痕跡とも考えられる。承和14(847)年には、櫛田川で下流域の流路を大きく西に替えるほどの洪水もあり、家屋田畠や人命にも被害を及ぼすこうした災害も信仰の促進につながっただろう。このカウジデン遺跡の南の丘陵裾(多気町池上)に想定される**成願寺**も、貞観5(863)年民部省勘文案に現れる。成願寺は大国・川合荘の東寺領をめぐって11世紀には激しい相論を繰り返している。

多気郡と度会郡との郡界に近い丘陵内の**長谷町遺跡**では、黒笹 90 号窯式期の灰釉陶器壺を蔵骨器とした 9 世紀後半から 10 世紀初めの火葬墓が見つかっている。骨の検討から被葬者は女性とみられ、高級陶器を入手できる階層が、神郡内で仏教に基づく葬送を行っていたことは注視される。

史跡齋宮跡でも、古代の伊勢道に沿った地点で 11 世紀中ごろの土坑 SK1730 に油煙が付着した小型の皿・杯類といった供献土器が多量に出土している。12 世紀に入ると寺院跡とみられる多気町の三疋田遺跡をはじめ、巴文などの軒瓦を出土・採集される遺跡が散見され、齋宮跡でも巴文瓦が 1 点出土しており、看過すべきではないと考えている。12 世紀の瓦窯は伊勢国内では確認されておらず、瓦は尾張の瓦窯からの搬入が考えられる。

このように、伊勢神郡内でも多気郡においては**9 世紀後半**には、中央の大寺院の影響も受けつつ在地氏族を中心に仏教の再浸透が進行したとみられる。

4. 神祇氏族による度会郡の仏教再浸透

一方、同じ神郡でも度会郡では、少なくとも寺院・仏堂などの整備といった形で見える仏教の再浸透はおおよそ 9 世紀代では確認できず、100 年以上遅れて進行している。正暦年間(990~995)、神宮祭主**大中臣永頼**は宮川右岸の低地部にある「箕輪」に宿館を構えた。神事に従事しながらも寺院建立を願い続け、内宮に三日間参籠して祈請したところ霊夢に三尺の金色の観音像が現れたことから、度会郡勢田村に**蓮台寺**を創建した(古事談)。さらに永頼はその後長保二(1000)年に死に臨んで出家している(祭主補任)。これを契機として度会郡内においても神祇氏族らによる造寺活動が活発化していく。

祭主家大中臣氏では、天永二(1111)年に**大中臣親定**が、「堂舎(岩出堂)を建てて仏事を修す」という記録がある(江都督納言願文集)。親定は神宮遷宮の期間での仏堂建立にあたって、永頼の蓮台寺の先例に従い、十分に祈請すればよいという公卿で学者でもある大江匡房の助言により建立がかない、京より瞻西上人を招いて法要を催したという。この玉城町岩出の遺跡群は一部が発掘調査され、遺構では確認できていないが、12~13 世紀の瓦類が出土しており仏堂が存在した可能性を示している。

大中臣氏以外では、長徳元(995)年には内宮祓宜**荒木田氏長**(荒木田二門)が、内城田郷(現在の玉城町田宮寺)に**田宮寺**を創建する(氏経神事記)。本寺には 11 世紀頃の作とされる**十一面観音立像**が二体納められこの伝承を補強する。また、このころ荒木田一門の氏寺である**法泉寺**(玉城町小社と推定される)も創建されたと言われる。外宮祓宜の**度会氏**も**常明寺**(伊勢市倭町)を 12 世紀には建立している。神祇氏族以外でも新家氏の氏寺とされる伊勢市小俣の**湯田廃寺**で 11 世紀以降のものとみられる軒瓦が採集されており、10 世紀末以降には度会郡でも広範な造寺活動があったことがわかる。

弘仁七(816)年の大中臣清持の解任事件や、天慶八(945)年齋王徽子の近長谷寺への施入からは、神宮や齋宮での仏教禁忌にも関わらず、神祇祭祀に関わる人々にも実態としての仏教信仰が伺える。度会郡でのこの 10 世紀末から 11 世紀にかけての仏教信仰の顕在化は、時期的に末法思想の広がりともなることは見逃せない。末法思想はいうまでもなく、釈迦入滅後に時の経過とともに仏法が衰えるという考え方で、平安時代には永承七(1052)年が末法第一年と考えられていた。こうした意識は浄土信仰の高まりや、経塚造営の動きとなっていく。日本の神々を仏教の護法神にあてたり、神々は仏教の諸尊の仮の姿で神仏は同体であるとする本地垂迹説の台頭など、神祇信仰の変容も促したとされる。大中臣永頼以後、各氏族の寺院建立に併行して祭主や神官層の卒前の出家が頻発するようになる。祭主及び祓宜の補任次第を見ると、11 世紀代だけでも大中臣輔親(長暦二(1038)年)、荒木田重頼(寛徳二(1045)年)、荒木田延満(天喜六(1058)年)、大中臣元範(延久三(1071)年)、度会康雄(延久四(1072)年)、大中臣頼宜(寛治五(1091)年)、荒木田延範(康和元(1099)年)と、祭主、内宮・外宮祓宜のいずれからも出家者を出している。8 世紀末にいったん仏教をタブー視した神祇氏族は、神仏習合思想の再高揚や大中臣永頼・親定が寺院・仏堂を建立するにあたって編み出した方便を待ってその信仰心を顕現化していったのである。

しかし、こうした度会郡への短期間での仏教浸透のエネルギーは、個々人の信仰心のみによるのだろうか。この時代の地域の動静を確認するため、度会郡内の集落・居館とみられる遺跡の消長をみて

みよう。第1表には発掘調査により時期が判断できる遺構・遺物が出土している遺跡の消長を示した。これによると宮川左岸・外城田川流域にあたる玉城町域では9世紀後半から10世紀前半にかけ、宮川右岸・五十鈴川流域にあたる伊勢市域では10世紀前半にほとんどの集落・居館遺跡が消失している。10世紀末の正暦～長保年間は平安京では疾病(疱瘡)が大流行して多数の死者が出て、正暦五(994)年・長保三(1001)年には貞観五(863)年以来の御霊会が行われている。大中臣永頼はこうした時代に伊勢箕輪に拠点を置き、蓮台寺を建立している。また樹木の年輪幅や年輪内の酸素同位体、海底堆積物の分析などによる気温・降水量の変動パターンの近年の研究では10世紀は少雨の時代で、特に中葉は高温とあいまって「農業危機の時代」と捉えられるようになった。

10世紀後半からは多くの集落・居館が再生あるいは新たに発生している。特に宮川左岸・外城田川流域の玉城町域は8～9世紀から遺跡はあるが明確な遺構は乏しく、10世紀後半以降から建物跡等の遺構が明確に伴うようになる。これら度会郡の10世紀後半から現れる遺跡と寺院・堂との関係をみると、大中臣氏の蓮台寺を除けば接近した位置関係にあるものが多く、立地の面では段丘面や丘陵端部が多いことから、耕作地の拡大といった新規の開発とも連動したものであることを窺わせる。これを整理すると、下記のような関係を示せる。

- ・法泉寺(玉城町小社：荒木田氏一門)・・・小社遺跡・上黒土遺跡・との山遺跡
- ・田宮寺(玉城町田宮寺：荒木田氏二門)・・・仲垣内遺跡・赤垣内遺跡・小ばし遺跡
- ・釈尊寺・岩出堂(度会町大野木・玉城町岩出：大中臣氏)・・・岩出遺跡群・蚊山遺跡
- ・常明寺(伊勢市倭町：度会氏)・・・隠岡遺跡
- ・湯田廃寺(伊勢市小俣町：新家氏?)・・・世古遺跡

多気郡の近長谷寺の座主奉俊らのように、地方寺院には中央の大寺院と関係を持った地方氏族の子弟が関係を持続させ、彼らを中心に仏教の知識結を結成することで勸農に深く関わったと考えられる。寺院が宗教施設としてだけでなく、地域の開発拠点としての役割も担ったと考えられるのである。

こうした社会情勢を踏まえて留意しなければならないのは、**大中臣祭主家の在地化**と祭主権力を背景とした神郡支配の確立と強化である。従来、神宮祭主は平安京内の邸宅に居住し、遷宮などの神事にあたって伊勢に下向していたが、『二所太神宮例文』や『中臣氏系図』には、10世紀末頃に大中臣永頼の「箕輪」から始まり、個々の祭主に「岩出」や「小社」「野篠」や「麻統」といった度会・多気郡内の地名を冠したものが現れる。『神宮典略』では、これらは祭主屋敷の所在地と考えられ、伊勢における別宅として成立し、祭主一族や近親の結集の拠点であったと評価されている。こうした屋敷地を意味する通称が、度会郡内に始めて蓮台寺を建立した永頼の「箕輪」からであることは示唆的である。おそらく祭主屋敷と共に氏寺として建立された寺院・仏堂もやはり一族結集のシンボルたりうるものだっただろう。こうした大中臣氏の在地化に対抗あるいは促される形で、旧来の在地の神祇氏族である荒木田氏・度会氏らも造寺活動を活発化させたとみることができるだろう。

度会郡での仏教の再浸透は、神祇氏族の仏教への傾倒と、10世紀の農業危機の克服、中央貴族であった祭主家大中臣氏の在地化とそれに対する在地氏族の対抗といった他の地域にはみられない過程を経ていったものであるといえるだろう。

5. 伊勢神郡と山林・山岳仏教

伊勢神宮の所在する神三郡(飯野郡・多気郡・度会郡)への仏教浸透には、もう一つの潮流を考える必要があると考える。それは**山林・山岳仏教**の存在である。

世義寺は、寺伝によれば天平年間に行基が、外宮南方の伊勢市前山町亀谷郷に建立したとされるが明確ではない。この地点での発掘調査(亀谷郡C遺跡)では伽藍の遺構は確認できていないが、治承二(1178)年の刻銘のある経筒とみられる陶器甕が、発掘に先立って採集されており、この付近にかつて寺院が営まれた可能性は高い。ここから移転後の現在の世義寺薬師堂の本尊である像高60.2cmの**薬師如来坐像**は、「本像は類例に乏しいが10世紀を下らない頃の作」と推定されており、造形の素朴さ、衣文や大衣前の渦巻き文など、「製作者の無知あるいは誤解が看取されることから、僧侶や仏師ではな

く、半俗の優婆塞や自度僧による造像」とも推定されている。造像と寺院の建立・時期は安易に同一視できないものの、標高 90m前後の舌状尾根に想定される元の世義寺の立地や、世義寺創建期の本尊とも目されるこの薬師如来が、しばしば修験寺院の神体と習合する(例えば鳥海山の物忌神、熊野速玉大社の速玉之男大神など)こと、後代に世義寺が真言宗の修験先達寺院となっていること、前山の世義寺推定地の背後の山間地に行場とみられる「養命の滝」「天神滝」などがあることから、世義寺は大中臣氏ら神祇氏族とは別の系譜の造寺、山林・山岳の道場として成立したと考えられる。

さらに神宮周辺の山岳地に注目すると、標高 555mの朝熊山頂上部の金剛證寺も神宮—伊勢の平地部から見えない側の斜面で、朝熊山の東西稜線と南の磯部に向かう南北稜線の交点に位置する。寺伝では空海が真言寺院として中興したとされるが、时期的に明確な資料は、本堂の解体修理に伴う発掘調査で下層遺構から出土した 12 世紀後半の山皿や、これも 12 世紀代に位置づけられている木造雨宝童子像である。しかし、金剛證寺の本尊が虚空蔵菩薩で、加えて金星明星太子も祀り、真言宗寺院として平安時代後期まで遡る可能性はあることから、これも大中臣氏ら貴族社会の寺院というより、世義寺同様、山岳寺院としての系譜を強く窺わせる。朝熊山東西稜線を東下すると、同じく虚空蔵を本尊とする庫蔵寺を経て、東端で行場でもある白瀧・彦瀧明神に至り、南北稜線を南下すると山伏峠を経て麓に、起源は定かでないが円空仏を納める薬師堂がある。また朝熊山全体には三波川変成帯由来の、鏡岩を代表とする巨岩・奇岩が散見され、山林・山岳修行の場としての要素を多分に持っている。

12 世紀後半以降は、金剛證寺の北西約 250mの経ヶ峯頂上に造営された朝熊山経塚群の経筒銘に造営参画者として荒木田氏や度会氏の名が見え、室町時代には天照大神と雨宝童子の同体説が強調されるようになるなど、神宮と金剛證寺—朝熊山は強い関係性が強調されるようになるが、やはり金剛證寺の創建は世義寺同様に、平地の神祇氏族の造寺とは別の流れと考えるべきではないだろうか。

もう一例、朝熊山の西側に宮川も超えて連なる国東山系の最高峰である標高 411mの国東山の山頂の南鞍部に国東寺跡がある。この寺院の起源も明らかではないが、近年 11 世紀後半～12 世紀のロクロ土師器が採集された。国東山の東には標高 302mの独立峰の大日山があり、宮川左岸の国東山系も修験の行場になっている。平安時代後期から寺院が整備されていたとは断言できないが、朝熊山と同様、少なくとも小堂や道場のようなものが置かれていた可能性はある。このように伊勢神郡では、神祇氏族や在地氏族によるものとは別の山林・山岳仏教の系譜も想定されるのである。

6. おわりに—中世伊勢神道の成立に向けて

これまで、伊勢神郡において 8 世紀末の仏教禁忌から、①多気郡には早期に中央の大寺院の寺領が成立し、在地氏族の発願で近長谷寺が創建された 9 世紀後半を画期に、郷単位程度の多数の小規模寺院が成立していったのに対し、②度会郡では 10 世紀末以降に、ようやく神祇氏族らの造寺活動が始まったこと、③また山岳部では世義寺・金剛證寺・国東寺といった山林・山岳仏教寺院が、密教の浸透とも合わせて平地部とは別の仏教浸透の系譜にある可能性を示した。仏教と山の関係は、8 世紀には役小角や行基に代表されるように国家的な仏教とは別系統の在り方を示し、9 世紀の天台・真言の密教との強い親和性はよく知られている。世義寺の薬師如来像から看取されるような優婆塞・優婆夷の存在は、一時は神郡を覆った仏教禁忌に影響されない山岳仏教のすがたを想起させる。

この②と③が合流するのが経塚の造営だろう。現在、伊勢国全体で確認している古代末の経塚は遺構が明確でないものを含めても 18 箇所だが、そのうち度会郡には 8 箇所が知られている。度会郡は多数の経塚密集地であり、それが 12 世紀後半から 13 世紀初頭の限られた期間に集中するとされる。なお、飯野郡・多気郡には経塚は確認されていない。先述の朝熊山経塚群のほか、小町塚経塚(伊勢市浦口町)、蓮台寺瀧ノ口経塚(伊勢市勢田町)など刻銘のある経筒・瓦経などには金剛證寺や万覚寺・常勝寺・常覚寺といった寺院名や僧侶名の他、大中臣・荒木田・度会といった神祇氏族名があり、これらが協同して経塚造営にあたったことが窺われる。経巻や瓦経などの形で埋納された経典がわかるものに、法華経・無量義経(開経)・観音賢経(結経)の他、般若心経・理趣経・大日経・宝篋院陀羅尼経や真言など密教との密接な関連をうかがわせるものがあり、こうした協同を裏付ける。

このように、古代において我が国でも格別の地位を得てきた伊勢神宮は、8～12世紀にかけて、地域的にも複雑な経緯で仏教の浸透と融合をみてきた。この経緯こそが12世紀の天照大神を大日如来の垂迹とするといった仏本神迹の神仏習合から、神宮側の特に度会氏による神祇信仰の主体性の確立を志向する新たな「神道」の覚醒と体系化を生む土台を形成させたのは、中世伊勢神道の分厚い研究からも明らかであろう。またこうした動きは、一見、神祇氏族の拠点である度会郡を中心に動いたかにも見えるが、伊勢神郡における仏教浸透の起点ともいえる多気郡の近長谷寺は、その立地や後世修験寺院としての性格を帯びていったことから、当地域での山岳仏教の起点ともなつたと考えられ、伊勢の宗教史の重要拠点だったといえる。

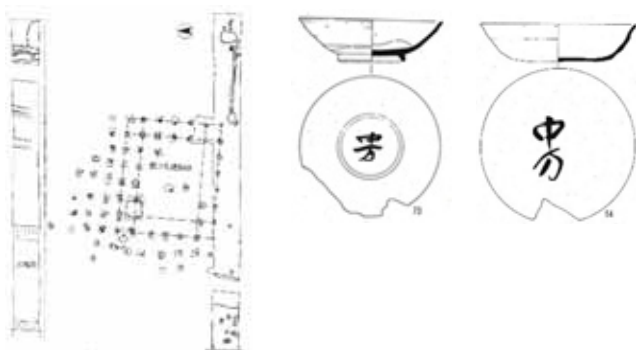
以上、まだ推測に基づく議論が多いが、伊勢の地域が後世の日本の思想史に与えた影響の大きさを本報告で僅かばかりでも感じていただければ幸いである。

《主な参考文献》

- ・岡田登「伊勢大神宮寺としての逢鹿瀬寺について」『史料』第85号 1986
- ・多田實道「奈良～平安時代の神宮と仏教」『伊勢神宮と仏教 習合と隔離の八百年史』2019
- ・山中由紀子「伊勢神宮寺をめぐる諸問題」『齋宮歴史博物館研究紀要 18』2009
- ・西口順子「九・十世紀における地方豪族の私寺」『平安時代の寺院と民衆』2004
- ・川尻秋生「日本古代における在地仏教の特質—僧侶の出自と寺院機能—」『古代東国の考古学』2005
- ・北村優季「疾病の流行」『平安京の災害史』2012
- ・勝山清次『中世伊勢神宮成立期の研究』2009 P47～68
- ・田村憲美「10世紀を中心とする気候変動と中世成立期の社会—降水量変動と国家的祈雨儀礼をめぐる覚書—」『気候変動と中世社会』2020
- ・赤川一博「世義寺の仏像」『三重県史研究』七 1991
- ・高橋美由紀「伊勢神道と末法思想」『伊勢神道の成立と展開』2010 再録
- ・西山克「胎金両部世界の旅人」『聖地の想像力—参詣曼荼羅を読む—』1998
- ・岡田莊司「両部神道の成立期」『神道思想史研究』1983
- ・谷本鋭次「経塚概要」『三重県史 資料編考古II』2008



第1図 逢鹿瀬廃寺系軒丸瓦
(左：逢鹿瀬廃寺・右：齋宮跡第146次調査出土)



第2図 カウジデン遺跡と墨書土器

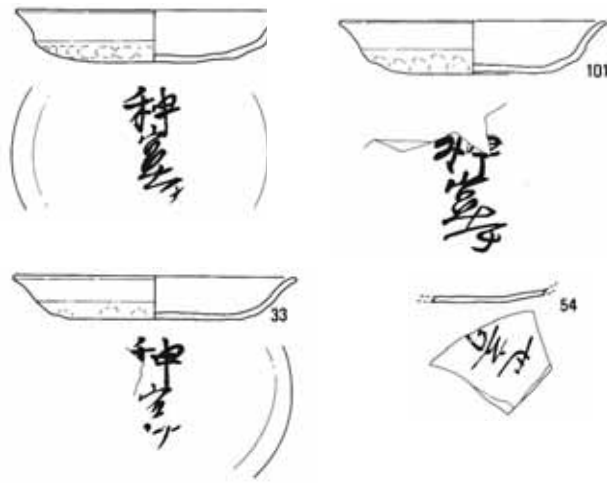


第3図 近長谷寺の十一面観音立像

	遺跡名	所在地	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	備考
度会	仲垣内遺跡	玉城町野篠字仲垣内						掘立柱建物2棟(1は廂付)、Ⅲ-3~の遺物
	赤垣内遺跡	玉城町野篠字赤垣内						掘立柱建物8棟(3は廂付・3は総柱)
	小ばし遺跡	玉城町矢野						
	波瀬B遺跡	玉城町下田辺字波瀬						竪穴建物2棟、井戸
	上黒土遺跡	玉城町山岡字上黒土						土坑
	小社遺跡	玉城町小社曾根ほか						
	坂本里前遺跡	玉城町坂本字里前						
	との山・アレキリ遺跡	玉城町中角						土坑・溝
	蚊山遺跡	玉城町岩出左郡・蚊山ほか						屋敷地を形成
	岩出遺跡群	玉城町岩出						
	寺田遺跡	玉城町佐田						
	田丸道遺跡	玉城町妙法寺						
	世古里中遺跡	玉城町世古						
	世古(西垣内)遺跡	玉城町世古						掘立柱建物1棟・井戸・溝
	カリコ遺跡	玉城町世古						
	中ノ切遺跡	玉城町山岡						
	大藪遺跡	伊勢市磯町						掘立柱建物1棟、井戸
	高向A遺跡	伊勢市御園町大字高向						竪穴建物2棟、掘立柱建物9棟
	高向B遺跡	伊勢市御園町大字高向						掘立柱建物6棟
	高向C遺跡	伊勢市御園町大字高向						竪穴建物4棟、掘立柱建物6棟、井戸2基
	高ノ御前遺跡	伊勢市有滝町字高ノ御前・茶臼塚						竪穴建物?1棟、溝?1条
	殿垣内遺跡	伊勢市西豊浜町野依字殿垣内						竪穴建物3棟、掘立柱建物4棟
	小御堂前遺跡	伊勢市磯町字小御堂前						掘立柱建物2棟、井戸1基
	野垣外遺跡	伊勢市上地町字野垣外						掘立柱建物5棟、竪穴建物5棟、土坑
	万所遺跡	伊勢市辻久留三丁目						掘立柱建物
	佐八藤波遺跡	伊勢市佐八町藤波						掘立柱建物、溝、柵列、土坑
	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町中ノ垣外・天白						掘立柱建物10棟以上、竪穴建物2棟、土坑
	寺原B遺跡	伊勢市佐八町寺原						掘立柱建物1棟
	下沖遺跡	伊勢市上野町字下沖						掘立柱建物1棟、井戸
	隠岡遺跡	伊勢市倭町字隠岡						掘立柱建物6棟、溝
	中山遺跡	伊勢市神田久志本町字中山						
	湯田鹿寺	伊勢市小俣町湯田野						寺院跡か
荘遺跡	伊勢市二見町三津・山田原ほか							
三津遺跡	伊勢市二見町三津							
野中遺跡	伊勢市二見町西字野中ほか							
多気	戸峯A遺跡	明和町池村字戸峯						竪穴建物12棟・土器焼成坑75基・井戸4基・土坑・溝
	戸峯B遺跡	明和町池村字戸峯						竪穴建物7棟・土器焼成坑20基・土坑・溝
	愛場遺跡	明和町池村字愛場						井戸
	堀田遺跡	明和町有爾中字堀田						掘立柱建物4棟・土器焼成坑20基・土坑・溝・井戸1基
	発シA遺跡	明和町有爾中字発シ・平田						掘立柱建物・竪穴建物・土器焼成坑・井戸・土坑
	発シB遺跡	明和町有爾中字発シ・平田						掘立柱建物13棟・竪穴建物8棟・土器焼成坑
	北野遺跡	明和町齋宮・上野・明星・葦村						竪穴建物・土器焼成坑
	外山遺跡	明和町葦村字外山・矢畑・深田						土坑
	本郷遺跡	明和町明星字桜出・下出・扇出・後山						掘立柱建物・井戸・土坑墓・区画溝
	黒土遺跡	明和町明星字黒土						掘立柱建物・竪穴建物・土器焼成坑・土坑
	長谷町遺跡	明和町池村						火葬墓
	カウジデン遺跡	多気町河田						掘立柱建物・自然流路 寺院跡?
	東裏遺跡	多気町河田						
	長迫間B遺跡	多気町東池上						掘立柱建物4棟
	ミゾコ遺跡	多気町四神田ミゾコ						掘立柱建物1棟・土坑・溝・井戸
	三疋田遺跡	多気町三疋田						溝・濠 寺院跡?
鳥墓遺跡	明和町箕村							

第1表 伊勢神郡の遺跡の消長

※網掛けの表示の濃色は遺構、薄色は遺物が確認されていることを示す



第5図 大川上遺跡出土墨書土器



第6図 世義寺薬師如来座像
四日市市立博物館提供



第7図 金剛證寺本堂



第8図 勢田川からみた朝熊山



第9図 伊勢の経塚分布図